

「茶人古田織部の死生観について」

愛媛大学 横井蒼大

本報告は千利休没後、天下一の茶頭として茶の湯界に君臨した茶人古田織部の死生観について、特に禅宗との関連を軸に考察を行うものである。

織部は大坂夏の陣の後、豊臣家に内通した嫌疑により、嫡子と共に切腹を命じられ、家財は没収された。その為、織部に關して不明瞭な点が多い。その様な状況下で戦前から少しずつ研究が蓄積されてきた。桑田忠親氏によって織部の基礎的研究がまとめられ、その後、久野治氏によって織部の生誕地の特定がなされた。また丸山幸太郎氏によって織部の官職名や信長、秀吉、家康期における織部の領地・支配地についての研究がされている。

本報告では、第一章で村田珠光に始まる茶の湯宗匠と禅の関りを、特に大徳寺との繋がりを軸に考察した。また茶人と茶道具にも禅の影響が色濃く見られ、利休は侘び茶を完成させた。その後、織部が利休の茶を革新し、織部独自の美意識と禅要素を融合させた茶の湯にしていく。

第二章では、織部の茶の湯界と徳川政権下における立場を考

察した。織部の茶人としての名声は頂点に達し、將軍家茶頭として活躍する他、島津義弘や伊達政宗、近衛信尹らと交流し各地の焼物にも影響を与える等、デザイナー的活動も行っていた。また將軍家茶頭として活躍しながら、依然として豊臣家に近い関係が家康を大いに悩ませていたと考えられる。豊臣政権下における利休の権威は諸大名を凌ぐものがあり、政治にも大きな影響力を保持していた。この事からも、家康は茶人が再び力を付ける事を危惧しており、織部を危険視する。第三章では、織部切腹の原因は大坂方や有力外様大名、近衛家といった有力者と交流していた織部の動きを危惧した家康によって排除されたことによると結論付けた。さらに、切腹受容の理由には禅の思想が関係すると考察した。『古田織部茶書』内に「元来、無一物の道理より万法出生し候」とあり禅の思想を理解し、また師の利休の死に様を模倣したと考える。即ちその思想は「本来無一物」であり、全ての事象は「空」であって自らの生死さえも執着しなかったと考えられる。

以上のように、茶の湯と禅は不可分であること、また茶人かつデザイナーでもあった織部像を確認した。さらに、切腹受容には禅の思想が関係しており、原因には豊臣家との関係を危険視した家康に排除された事によるとした。

史鍊会 (於愛媛大学) 令和六年三月十六日(土)
茶人古田織部の死生観について

愛媛大学法文学部四回生 横井蒼大

はじめに

第一章 茶の湯と禅

第一節 茶人と禅

第二節 茶道具と禅

第二章 古田織部の立ち位置

第一節 茶の湯界における立ち位置

第二節 徳川政権下における立ち位置

第三章 古田織部の切腹

おわりに

第一章 茶の湯と禅

茶の湯と禅は「茶禅一味」の精神により一体のものとされてきた。また、村田珠光をはじめとする茶の湯宗匠たちも大徳寺などを通じて禅と深い関わりを持っていた。この章では茶人と茶道具と禅の関わりを論じる。

第一節 茶人と禅

【史料一】『山上宗二記』『山上宗二記』と茶人宗二⁽¹⁾

一、茶湯ハ禅宗ヨリ出タルニ依テ僧行ヲ専ニス、珠光紹鷗悉禅宗也

【史料二】「古溪宗陳道號頌」『大日本史料 第十一編之二十一』所収⁽²⁾

泉南之抛筌齋宗易

迺予三十年飽參之徒也

禪餘以茶事爲務

頃辱特降綸命

賜利休居士之號

聞斯盛舉不堪歡抃

贅一偈以抒賀忱云

龐老禪通老作家

心空及第等閑看

風露新香隱逸花

乙酉菊月 日

古溪叟

【史料三】「龍寶山大徳寺誌」『大日本史料 第十二編之二十一』所収⁽³⁾

乾寶山外志 金湯、古田織部助重能、(割注)「或作重勝」、利休没後、茶家推古田而爲宗匠、嘗參春屋國師、稱俗弟子、國師授與法稱、全甫宗屋居士、自扁所居、日卯齋、元和元年六月十一日、七十二卒、

第二節 茶道具と禅

【史料四】「古市播磨法師宛村田珠光書状」『特別展 茶の湯』所収⁽⁴⁾

古市播磨法師、珠光、此道、第一わろき事ハ、心のがまむがしやう也、こふ者をばそねミ、初心の者をバ見くたす事、一段無勿躰事共也、こふしやにハちかづきて一言をもなげき、又、初心の物をばいかにもそだつべき事也、此道の一大事ハ和漢之さかいをまきらかす事肝要く、よう

しんあるへき事也、又、当時ひゑかるゝと申して、初心の人躰かひせん物しからき物などもちて、人もゆるさぬたけくらむ事、言語道断也かるゝと云事ハ、よき道具をもち、其あぢわひをよくしりて心の下地によりてたけくらみて、後までひへやせてこそ面白くあるへき也、又さハあれ共、一向かなハぬ人躰ハ道具にハからかふへからず候也、いか様のとてとり風情にてもなけく所、肝要にて候、たゞかましかしやうかわるき事にて候、又ハかまもなくともならぬ道也、銘道ニいわく心の師とハなれ、心を師とせされと古人もいわれし也

(読点や傍線は発表者が外した。)

【史料五】『山上宗二記』『山上宗二記 天正十四年の眼』所収⁵⁾

(前略)

一、漁夫、牧谿和尚筆、豊後ニアリ、賛ハ虚堂、墨、紙ニ書候、豎絵也、
一、布袋絵、牧谿筆、堺モスヤ宗安ニ在、閑翁賛、一、船子、牧谿筆、堺天王寺ヤ宗及ニアリ、虚堂賛也、右三幅一对也、一、菜絵、牧谿自書自賛、蜂屋出羽守所持、客來一味、横也、一、大根絵、是モ自書自賛、太子ヤ所ニアリ、一对、息庵日々ニ飽、賛アリ、右之外牧谿大軸・小軸・横絵少違而八景十六幅アリ、大軸ハ千貫、小軸ハ五百貫ナリ、古人名物トテ用之、但当世ハ如何、惣別牧谿此外軸数多シ、名物ニ可入、依テ主二代物高直ニモ可取、但侘ヲ立ル数寄者無所望、条々在口伝

(後略)

第二章 古田織部の立ち位置

第二章では茶人古田織部の立ち位置について茶の湯界と徳川政権下の面から考察を加える。利休没後天下の茶の湯宗匠として君臨する織部が茶の湯

界にどのような影響を与えたのか、また將軍徳川秀忠の茶の湯の師として名前は最高点に到達するも、大坂冬の陣後切腹を命じられるに至る過程を辿り徳川政権下ではどのような様な役割を果たしていたのかについて考察する。

第一節 茶の湯界における立ち位置

【史料六】「多聞院日記 慶長四年三月二十二日条」『多聞院日記』所収⁶⁾

廿二日、勲行如前、天氣能候、行房ヨヒニ来候間遣酒ヲ被申候、酔候て歸候、伏見より織部ト云茶湯名人來候、

【史料七】『江岑夏書』『茶道古典全集 第十卷』所収⁷⁾

利休弟子衆七人衆と申候ハ、一番、かもふ飛驒守殿、五番、瀬田かもん殿、三番、細川越中殿、三斎ノ事、二番、高山右近、南坊ノ事、六番、牧村兵部太夫殿、七番、古田織部殿、四番、芝山監物殿、
此内、織部一茶之湯能無候、併後、惣和尚ニ成被申候、右七人ハふゑん世ニ勝申候

【史料八】「松井康之宛古田織部書状」『古田織部の書状』所収⁸⁾

遠路と申、毎々御懇意ニ候而、難申謝存候々々此せとちやわん様子おもしろく候、貴進入候、是にて御茶をたて候ハ、可畏悦候、いそぎ申入候事候、已上、去卯月二日之御状、致到来、拜見申候、

一、御茶入ふた、袋、貴意ニ入候よし、珍重存候、今度御茶入之事、忠興公御とい被成候間、思召よりハ能可有御座と申上候、弥御秘蔵尤存候、一、珍敷様子之かつは壱并二重嶋之ひとへ物三ツ、御国之御酒樽五ツ、過分存候、御樽迄さへ給候ニ、色々御念之入候、御音信書中に不得申忝

存候、一、しゆびんせき之墨蹟様子よく御座候と存候、則表具申付候、箱も惣而さし申、緒も付候て封を付、御使へ渡申候、御茶入之いへ之事、覚甫被申之由候間、無是非候、一、御茶入盆之事、今新敷を御茶入にハいか候はん哉、唐之あかき盆之ちいさき御入候ハ、御取合可被成候、此方にて相尋可申候、近候ハ、可申承物をと、年寄候へハ、御床敷さ御推量之外二候、爰許相替儀無之候、相応之御用、不置御心可被仰上せ候、不可有疎意候、恐惶、

古織部

六月三日

重然(花押)

松佐州様

貴報

【史料九】「島津義弘宛古田織部書状」『没後四〇〇年 古田織部展』所収⁹⁾ 猶以遠路切々ノ御懇書忝令存候、此方相応之御用可被仰下候、不可有疎意候、江戸爰元相替儀無御座候、も奉期後音之節候、伊平佐迄申入候、已上、去九月廿日之尊書今日致到来、拜見仕候、

一、二ツ被成御上せ被下候、毎々御懇情之至不申足候、

一、宗箇罷下色々御懇共、於我等忝存候、然者、宗ヶ罷上候時之焼物共、

散々悪敷御座候、委細御報ニ申入候、参着候哉、宗箇好申候焼物散々物

二而御座候、無是非候、

一、唯今参着申候肩衝乍二ツなり能御座候、乍去薬能も無御座候、薬ハくろめなる薬之多御座候か能御座候、所々白キ薬之入候も能御座候、なりハ被成御作せ候が能御座候、今御上せ候茶人方も、少せいを高く御作せ候が能御座候、此分ニ大サモ能御座候、尻ノすばり候ハぬ様ニ可被仰付候、口肩ハ能御座候、二ツ内薬ノ黒ヲ留申候、今老ツ為被成御覽返進申候、恐惶謹言、

古田織部

十一月廿二日 重然(花押)

惟新様

尊報

第二節 徳川政権下における織部の立ち位置

【史料十】「台徳院殿御実紀 慶長十五年九月九日条」(出典:『藩翰譜』、

(『新訂増補国史大系 第38巻 徳川実紀第一篇』所収¹⁰⁾)

(前略)

また古田織部正重然は千利休宗易が貫首弟子にて。點茶の技當時其右に出る者なし。よて江戸にめして。これもその技をうけさせ給ふ。

第三章 古田織部の切腹

元和元年、大坂冬の陣が終結した後、織部は長子重広と共に、家康より切腹を命じられる。罪状は豊臣方への内通であった。そして、織部は一言も弁明をすることなく従容として死を受け入れたとされる。本章では織部の死生観について考察する。

【史料十一】『慶長見聞書』(『大日本史料 第十二編之二十一』所収¹¹⁾)

五月廿一日、古田織部も切腹被仰付、御檢使ハ内藤右衛門尉也、織部ハ息子山城江戸ニ詰させ、其弟左近も御奉公申、將軍様殊之外被懇御目候處ニ、如玄と申連歌師薩摩方のほり、織部所ニ罷有候、是を使二而、大坂方鳴津方え被仰下事及兩度候、又織部孫ニ左助と申者牢人二成、大坂ニ致籠居、今度

之火付之中ニ、織部が茶道宗喜并ニ如玄等大將也、ケ様之儀重々に而、終ニ如此被仰付、

【史料十二】「豊臣秀頼側近某書状 青民少宛」『没後四〇〇年 古田織部展』所収⁽¹²⁾

古織殿唯今御下由候、大修殿迎ニ御出候由候、明朝市正殿へ御出ニ候、
昼御山里にて御茶被下新門様へも飛脚被遣候、きさま殿も御相伴ニ可被
召加哉との御内証候、内々其御心得可被成候、きる物御もち被成候、ハ
すハ、御かり候て尤候、恐惶、
霜月十七日(花押)

重□

青民少殿 宗□

人々御中

【史料十三】「細川忠興書状写」『ものふと茶の湯 利休から織部・忠興・康之へ』所収⁽¹³⁾

(前略)

一、古田織部、大坂へ内通仕候儀立 御耳、去十一日、於伏見主屋敷切腹被
むす子小平二事仰付候、同山城も同事ニ切腹にて候、此外、江戸御小性
ニ一人、松平武蔵殿ニ一人、北国筑前所ニ一人、織部むす子御入候を、
何れも御成敗ニ而候、女ハかねの有所可存とて、中川内膳ニ預ケをかせ
られ、御せんさくにて候、山城母者、仙石平太いもにて候、平太ニ命
をたすけ被遣候事、そふへ久内事

(後略)

参考文献

(研究史)

- ・岡倉寛三著、村岡博訳『茶の本』(岩波文庫 一九七九)
- ・筒井紘一『茶の湯と仏教 僧侶の事績から辿る』(淡交社 二〇一九)
- ・桑田忠親『古田織部』(寶雲舎 一九四六)
- ・丸山幸太郎「古田織部の生涯と謎」『岐阜女子大学地域文化研究』所収(岐阜女子大学編 二〇二二)

(史料)

- (1) 神津朝夫『山上宗二記』と茶人宗二(宮帯出版社 二〇二二)
- (2) 東京大学史料編纂所編『大日本史料 第十一編之二十一』(東京大学出版会 一九九六)
- (3) 東京帝国大学史料編纂所編『大日本史料 第十二編之二十一』(東京帝国大学 一九一九)
- (4) 橋本雄「珠光「心の一紙」を読む」『特別展 茶の湯』所収(東京国立博物館 二〇一七)
- (5) 五島美術館『山上宗二記 天正十四年の眼』(二九九五)
- (6) 辻善之助編『多聞院日記』(角川書店 一九六七)
- (7) 『茶道古典全集 第十卷』所収(淡交社 一九七七)
- (8) 伊藤敏子『古田織部の書状』所収(毎日新聞社 一九八五)
- (9) 『没後四〇〇年 古田織部展』所収(ZENプロモーション 二〇一四)
- (10) 黒板勝美編『新訂増補国史大系 第38巻 徳川実紀第一篇』所収(吉川弘文館 一九九八)
- (11) (2)に同じ。
- (12) (9)に同じ。
- (13) 『ものふと茶の湯 利休から織部・忠興・康之へ』所収(八代市立博物館未来の森ミュージアム編 二〇一九)